

その先に、見えるもの

—都市の谷間にそっと舞い降りるオブジェクトとしてのリボン—

20643007 安藤 美香

指導教授 小形 徹

〈敷地〉 みなとみらい 21 地区には、3 本のモールを骨格として、地区全体に安全で快適な歩行者ネットワークがめぐらされている。その中のひとつである「グランモール軸」は、横浜駅側から横浜美術館やランドマークタワー、クイーンズスクエアなどへと続く歩行者空間であり、平日休日問わず多くの住民や観光客などが利用する。超高層ビルの間を通るこの道は、視線が固定されがちな空間であり、どこか周囲とは切り離され、都市の谷間としてそこに存在しているように感じる(図 1)。このグランモール軸の一区画、長さ 180 メートル、幅員 25 メートルの歩行者空間に敷地を選定する(図 2)。

〈提案〉 都市の谷間にそっと舞い降りるオブジェクトとしてのリボン。自分とその周囲との関係性によって開いたり閉じたりする空間、その先に果てしなく変化するパースペクティブが次々と開かれていく状態を、点在しているリボンを通じて体感する。自分が動き、相手も動き、風は流れ、木々がそよぎ、光は地面に影を落としながら降り注ぐ。相対的に物事が流れ変化する中で、ふと存在するかけがえのない一瞬。

都市の谷間に存在する長さ 180 メートルという限られたときの中で、歩行空間が相対的に広がり縮まりを見せるような場を真っ白に塗られたスチール製のリボンによって演出する。ここを歩く人の視界の中でリボンが重なり絡み合うことによって、視線が固定されない道が無数に創り出され、ここを歩く人の動きや視線の中で、さまざまな場が風景とともに生まれては消える、そんなひとときを都市の谷間のインテリアとして提案した。

〈計画概要〉 何かと何かの距離は、そこにできる空間の始まりであり、点在するリボンは視線の中で風景と絡み合い、それぞれの思いの中に一瞬の場をつくりながら刻々と漂い流れる。リボンに移りこむ光や影は、身近にいつもあるのに見過ごしてしまいがちな都市の中のひとときの美しさを、そこにしかない一瞬の風景として映し出し、そこにあるもの以上の空間の広がりや豊かさを静かに体感させる(図 3)。

リボンには 3 種類の太さ(1 メートル、2 メートル、3 メートル)を設定し、それぞれの長さはすべて統一した。それらのリボンをひねり膨らませながら配置するため、太さや長さは距離感や見る角度によって無数になる(図 4)。それぞれのリボンの配置は、人がこの歩行空間にいつの間にか迷い込み、ふとした瞬間を体感できるように、入り口となりうる部分には、なるべく視線を先へ通すように太さ 1 メートルのリボンを設置する(図 5)。そこを起点として程よい距離感を保ちながら、隣り合うリボンの太さを 1 メートルずつ変化させながら配置する(図 9)。また、それぞれのリボンの始点と終点の向きを長軸方向に揃えることで、点在するリボンは移動する視線の中でより曖昧に絡み合うようになり、空間に動きを生む(図 6、図 10)。

ひとたび雨が降ると、リボンを伝って流れおちた雨水が地面に自然と水たまりをつくりだすよう、地面にあるグリットを交互にわずか 1 センチだけ下げる(図 7)。水たまりに気付かず、そのまま通り過ぎてしまう人もいるだろう。しかし、ある時不意に気を留め覗き込んでみると、そこに映りこむリボンの先に見えるもうひとつのビルや空、そよ風によって揺らめく水面や、次々に広がっていく雨水の波紋・・・そこには突如として新たな空間が風景とともに開き始める(図 8)。しばらくして雨がやみ、その数時間後、水たまりは蒸発し、消えてなくなり、この場所はまた元のすがたへと閉じていくだろう。

〈展望〉 日常の延長にあって、同時に別の時間を感じられるような、空間や時間の広がりや気配として体感でき、それらに影響されてうつり変わっていく自分自身や周りの空間。目に映るものだけではない、その先にある静かなひとときを人々はどれだけ普段感じているのだろうか。慌ただしく過ぎる都市の時の流れの中で、ものの見方や時間の過ごし方に余裕のない日々の、美しくはかない、かけがえのないふとした一瞬と出会える場になることを願う。

その先に、見えるもの。